

グッドプラクティショナー 紹介

推薦文

山根正敬さんを

グッドプラクティショナーに推薦する理由

社会福祉法人福祉楽団のことをまだ知らない人に説明するのは少々難しい。いや、面白い。千葉を中心に、色々な施設があるが、山根正敬さんがいらっしやる「恋する豚研究所」(恋豚)のある場所がまさにその思想と実践の原点だと思っっている。制度の側面から見れば、ここは就労継続支援 A・B 型を主軸とする事業所なのだから、障害をもつ方々が自分らしく働くことができる施設である。だが、ここを「豚しゃぶが美味しい、行列のできるお洒落なレストラン」としか思わずに遠方から食べにくるファンも多い。また、自然豊かな土地柄、農林業やまちづくりを通じて地域の大人や子どもたちとも交流していて、交わりの中から「福祉」を超えた楽しい発想が生まれている。楽しいだけでなく、それが利用者の仕事となり、地域の方たちの日常を潤しているのだから、本当に創造的で

ある。山根さんは、その「恋豚」の船頭さんのような方だ。

山根さんの言葉に「ケア」や「くらし」を考える、とある。それは一人一人の利用者の人生を豊かにするという意味でもあるし、地域全体をよくしていくということでもある。両者は矛盾することではなく、むしろみんなで創り上げていき、一緒に幸せになっていくものだ、というメッセージが読み取れる。またそのためには「福祉を変える」ことも必要なのだと、山根さんは書いている。

チャンスがあれば、ぜひ多くの方に恋豚を訪れ、景色と、風と、野菜と、人と、建物と、名物の豚しゃぶを楽しんでほしいと思う。ただし行列ができるので、時間にゆとりをもって出かけましょう。

(推薦者：東洋大学教授 加山 弾)

〈グッドプラクティショナーについて〉

1 背景と目的

- ・よりよい実践を発掘・評価し、広く伝えることにより、よりよい実践が拡大することを目指す。
- ・よりよい実践を行っているソーシャルワーカーの仕事ぶりを紹介することによって、よりよい実践とは何か、よりよい実践のためには何が必要か、などについて読者に考えていただく契機を提供する。
- ・これにより、ソーシャルワーク学会として、理論の発展だけでなく実践の向上を、また、理論と実践の往復運動の促進を目指す。

2 方法

- ・推薦者から候補者名をあげていただき、その推薦理由(200~400字程度)を書いていただく。合わせて、候補者に執筆の承諾をとっていただく。
- ・候補者は学会員以外でも可能。執筆内容は「実践内容」。
- ・承諾を得られた候補者には、編集委員会から「私の実践：ー」といったタイトルで、実践内容を紹介していただくように依頼する(3,200字程度)。

私の実践

20年後の地域の風景をつくる

山根正敬 (社会福祉法人福祉楽団 栗源事業部長)

1. はじめに

私たちは千葉県香取市(旧栗源町)で、栗源協働支援センター(2012年9月～就労継続支援A型:定員25名)と栗源第一薪炭供給所(2018年3月～就労継続支援B型:定員20名)を運営しており、現在合わせて48名の働きづらさを抱えた人が利用しています。

栗源協働支援センターでは「恋する豚研究所」というブランドで豚肉・豚肉加工品の製造・販売、レストランの運営を、栗源第一薪炭供給所ではサツマイモの生産、森の手入れ、薪や木工品の生産、スウィートポテトの製造・販売を行っています。大変ありがたいことに、少しずつ認知度が広がり、平日は150～200名、週末には400～500名の人が来訪され、レストランは1時間～1時間半待ちになることもしばしばです。

2. 事業開始のきっかけと展開

2003年より同市で高齢者サービスを展開してきましたが、地域の現状(「障害者のはたらく場所がない」、「自分が死んだらこの子はどうしたらいいか」、「毎日通っても月5000円程度しかもらってこない」←当時B型の平均工賃は全国平均で11,000円余り)を聞くにつけ、障害があっても月10万円を支払える仕組みが必要ではないかと考えました。

同時に、福祉楽団設立時の理事長(故・在田正則氏)が営んでいた養豚業を生かし、ブランド化

してもっと多くの人に自分たちが育てた豚肉を食べてもらいたいという思いもあり、栗源協働支援センターがスタートしました。

そして、2012年から事業を進めていくなかで、年々周りの地域には手つかずになった荒れた里山や、使われなくなった畑を見ることが増えていきました。高齢者施設で話を聞いていると、「息子ら、都会出ちまったけど、この山さ、どうすっかな」「自分じゃできねえけど、そのままにしていると畑が草だらけになって、人に迷惑かけちゃうな」という話を耳にしました。福祉楽団の法人理念である「ケアを考え“くらし”を良くし福祉を変える」という視点でとらえた時に、地域の畑を耕し、里山を手入れしていくことも、“ケア”であり、今振り返ると、栗源第一薪炭供給所を始めることも必然の流れだったように思います。

3. ブランドづくりと大切にしていること

恋する豚研究所という名前は「豚が恋をすると幸せを感じ、健康で健やかに育つだろう」というイメージからきたものです。そのイメージを実現させるために、発酵飼料を中心としたえさづくりから取り組んでいるアリタホックサイエンス(在田農場)の豚を使用しています。エサから自分たちでつくっている農場は全国にもあまりありません。また、豚肉の味や成分は科学的に分析をして品質のエビデンスをもっているほか、ハムやソーセージなどの加工品は余計な混ぜ物はしないとい

う考え方で丁寧につくっています。農場から加工、販売まで一貫して経営していることで、自信をもって売ることができる商品をつくっています。

そして、商品のパッケージデザインや建物のデザインにクリエイターが入ることで、商品本来のもつ価値をより高めて（変換させて）、消費者に伝えることができるのではないかと考えています。

話しは少しそれますが、自分たち消費者は、商品や料理を目の前にした時に、何を基準に日々選択、購入しているのでしょうか。きっと、味、価格、見た目、デザイン、カッコ良さ、安心感…といったところではないでしょうか。「障害者が作っているので買ってください」ではなく、きちんとおいしいものを作り、その良さを知って正当な価格で買ってもらうことが重要だと考えています。

障害者施設ですので、特性にあった仕事や本人に寄り添う支援は大事ですが、それが前面に出てしまうと「売れる商品」「一般のお客様の視点」というものがずれてしまいます。市民まつりやバザーで売上10万円を達成するのも大切ですが、“1年に1、2度”10万円を稼ぐよりも、“毎日”10万円商品を買ってくれるお店を探したり、“毎日”20万円をレストランで売上げることのほうが重要です。「あなたが元気に挨拶をしなかったら明日から売上が下がりますよ」「あなたがだらしな性格でいたらお客さんが減っちゃうんですよ」と繰り返し伝え続けています。そこに障害のあるなしは関係ありません。

栗源第一薪炭供給所では最近、森の輪（もりのわっこ）という新生児に配る木のおもちゃの生産を始めました。地域の山の持ち主さんとともに「香取市持続可能な森づくり協議会」を立ち上げ、里山の整備も行っています。サツマイモ生産においては、年々うちの畑も使ってくれないかという話が増えてきています。地域でちょっと困っていることを福祉と結び付けて、ちょっとでも地域が元気になるような活動につなげていきたいと思っています。

4. 日々の関わり、ケアについて

自分たちはできる限り「障害者」と「健常者」、「支援を受ける人」と「支援する人」いう対立的な視点で捉えないようにしています。「人は誰でも苦手なことは必ずあり、そうしたものがたまたま生活に支障を与えていないだけで、皆同じですよ」ということを、日々職員には伝えていきます。

もちろん、働きやすいように手順書やマニュアルを作成したり、見える化や構造化といった対応は行っているつもりですが、障害のある職員のためになにか特別なことを行っている感覚はありません。手順書やマニュアルがあることは、誰にとっても働きやすさにつながるはずで。

当施設では、障害のある職員のサポートは、各部門の所属長をはじめとした一般の職員とともに、連絡を密にしながら協力して取り組んでいます。すべての職員に、障害のある職員との関わりを大切にしてほしいと思っています。統計的にみると、日本では約13人に1人が障害者手帳を所持していますが、障害のある人と接する機会はそう多くありません。だからこそ、あまりプラスではない障害者のイメージができあがってしまう。しかし、実際に一緒に働いてみると、できることの幅広さ、素直さなど、本来の「人」としての違いで接することができるような気がします。

小中学校の職業体験の子どもたちが毎年来ますが、具体的な業務の多くは、障害のある職員から教えてもらっています。しかもその職員の仕事が早い。「福祉」「障害者」は支援する対象と捉えていた多くの子どもたちが、逆に障害のある人から職業支援を受けているわけです。体験の終わりには「(いい意味で)障害ということがよくわからなかったです」という感想を言う子が多いです。こういうことがまさに障害を理解する教育なのではないかと思っています。

もちろん、日々簡単には解決しない問題も多く発生しますから、その時に支援員が間に入ったり、直接話を聞いたりして対応しています。各部門のリーダーは現場をうまくまわすことも大事な

仕事ですので、じっくり話を聞くことが難しいことも多いです。また、コミュニケーションの取り方や物事の伝え方などに悩む職員も多く、社会福祉士などの有資格者からのスーパーバイズやOFF-JTなどの研修を行い、できる限り不安や心配事が大きくならないうちに対処することを意識しています。

「障害者だから」という理由で寄り添いすぎず、すべての職員が働きやすいようにするという視点が大事であり、人の多様性を尊重しながら働くことは、自分自身の個性も認められるということになると思っています。

5. おわりに

約10年、ここでの取り組みを進めてきて、いわゆる「障害者」に対しては一定の支援を行うことができてきたように思います。今後は障害のある人だけではなく、支援の網から漏れてしまう人（刑余者や生活困窮者、比較的元気な高齢者など）もはたらせる場所にしていきたいと考えています。個々に色々な事情はあるにせよ、ここに来れば、さまざまな仕事があって、相談に乗ってくれて、なんとか稼ぐこともできるらしいよ・・・そんな空間にしたいと思っています。そしてそれらの活動が、ここ栗源地域の20年後の風景をつくる活動につながっていくよう、今後も試行錯誤していくつもりです。